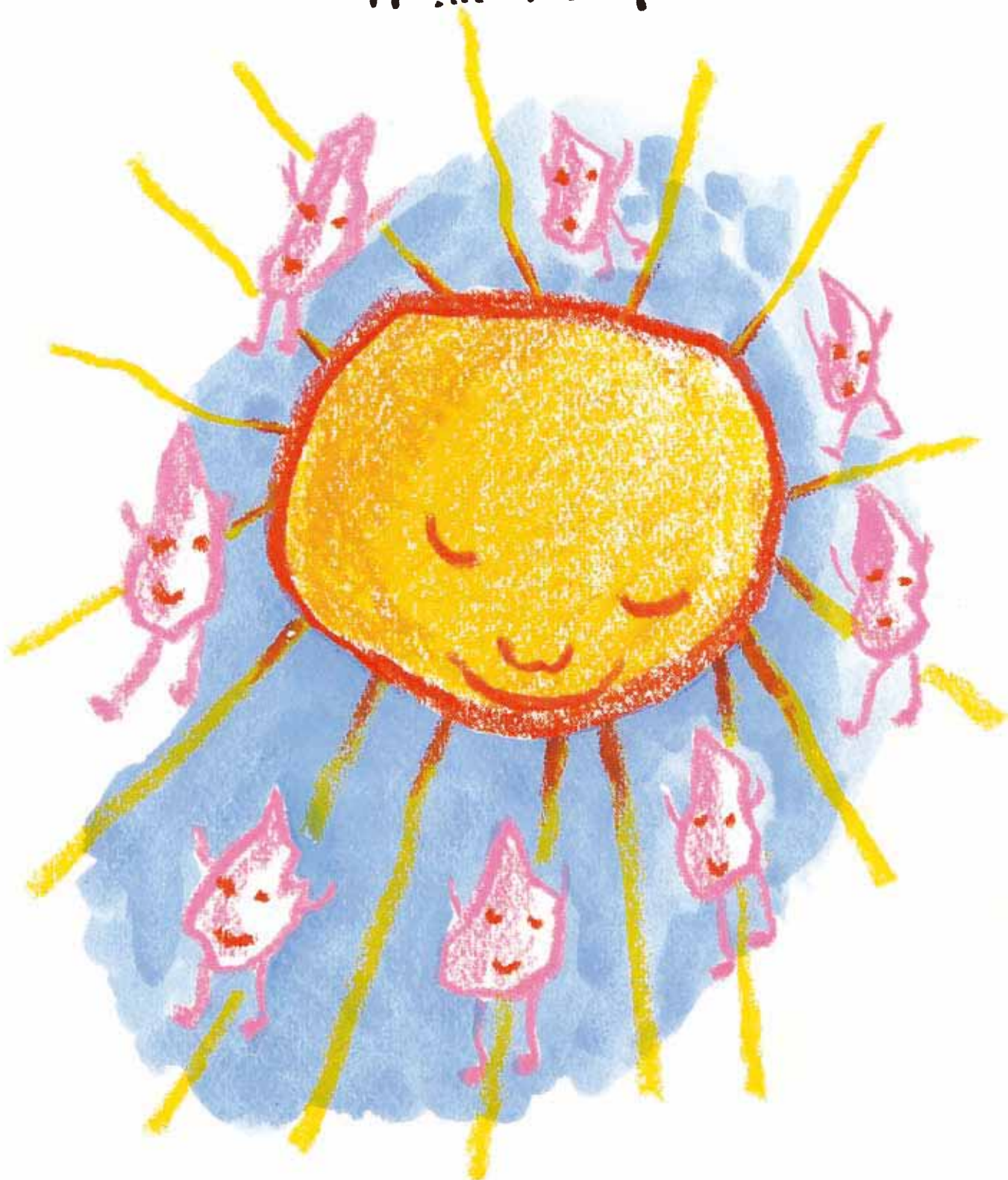


火 ひ の 話 はなし

さく くろ だ せい た ろう
作・黒田征太郎



とおいとおいむかし
遠い遠い 昔のことです。

ニンゲンには

まだ 名前も ありませんでした。

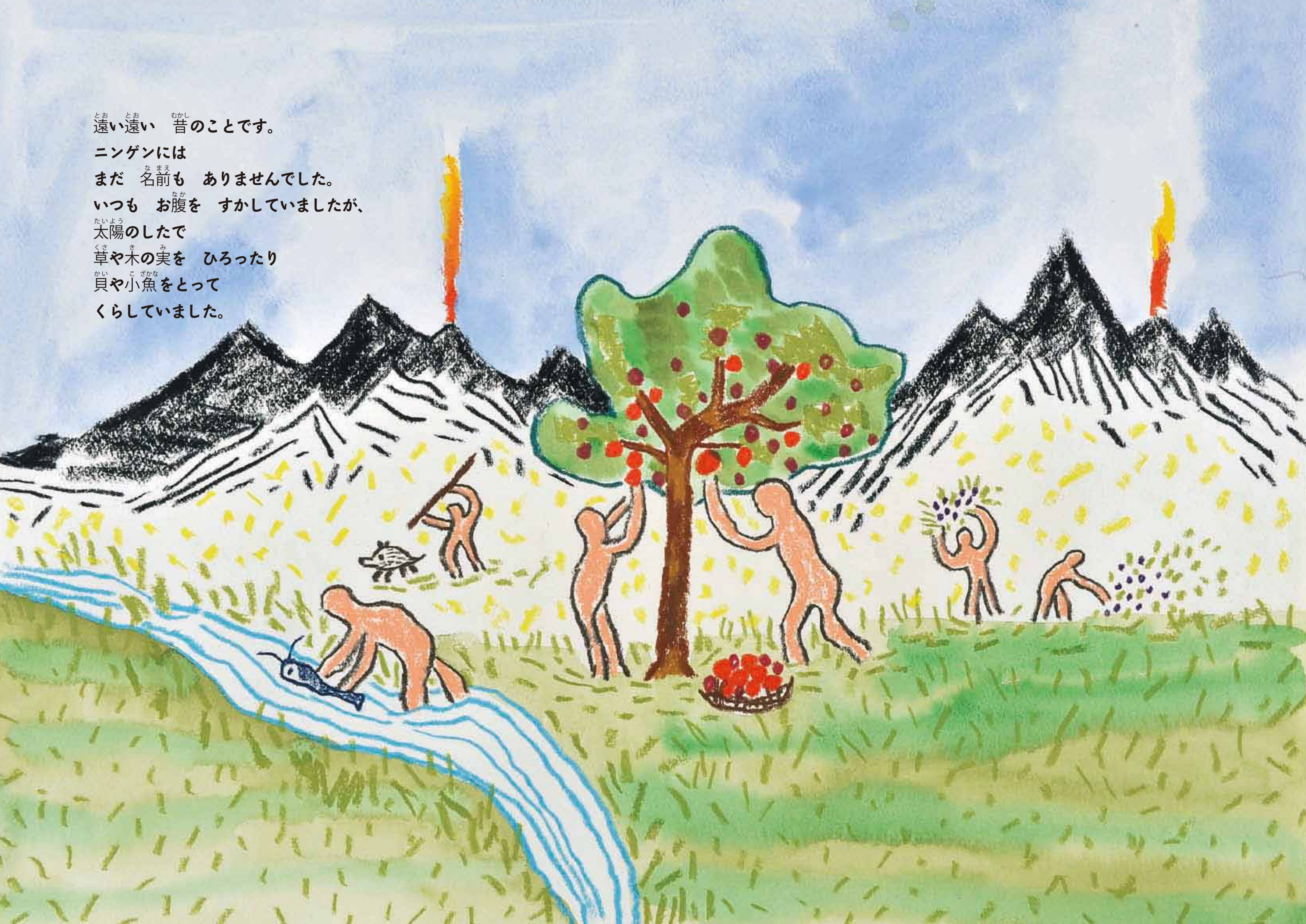
いつも お腹を すかしていましたが、

たいよう
太陽のしたで

くさき木の実を ひろったり

かいこぎかな
貝や小魚をとって

くらしていました。





よる
夜になると 闇は深く
ほし つき あ
星や月の明かりだけが
なくさめでした。

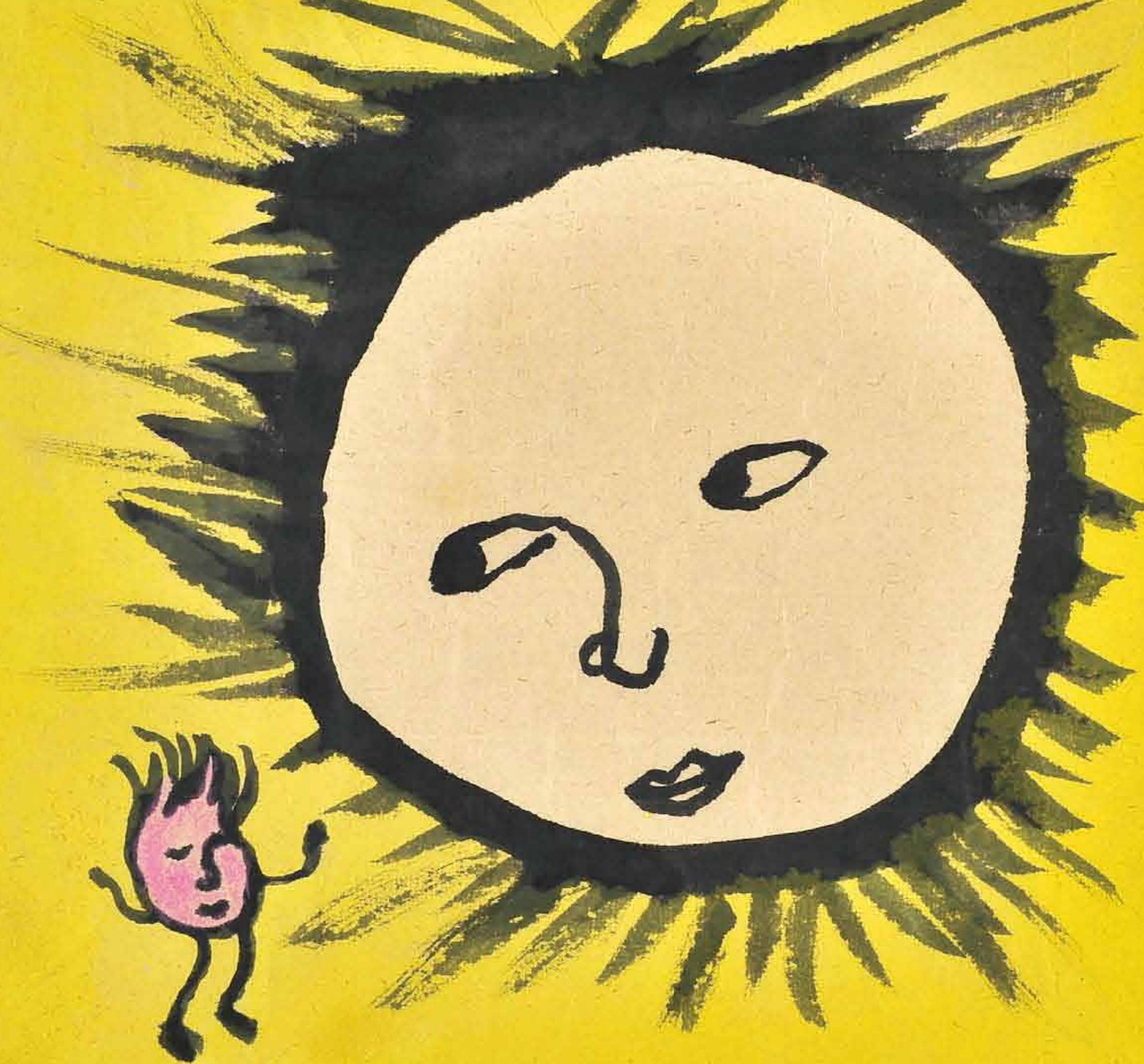
ニンゲンたちは
くろい とう なか
暗い洞くつの中で
身をよせあって
ふるえていました。



やま 山では 火が 吹きのぼり、
だい ち 大地は ゆれ動いていました。
かみなり 雷が落ち おやま 山火事も おこりましたが、
ニンゲンにとって
ひ 火は ちか 近よりがたく
おそろしいものでした。

ニンゲンは ほかのどうぶつ 動物に くらべると
ちから 力も弱く 動きも うす 素早くありません。
そのかわりに 「ちえ 知恵」を だしあい
なか ま 仲間と 助けあいながら
い 生きていました。

ひ 火の神の使い ヒノコは
さむ 寒さと うえ 飢えに ふるえるニンゲンが
かわいそうに おも 思え
ニンゲんに ひ 火を あげたいと
かんが 考えました。



火の神は ヒノコの願いを 聞いて
考えこみました。

ニンゲンが

火を あつかうことに

不安が あったからです。

それに 火がなくとも

ニンゲンは じゅうぶんに

幸せではないかと 思ったからです。

火の神は 水の神に 相談しました。

ニンゲンの生命は

すべての生き物と 同じように

もともと 水の神といっしょに

生み出した ものだからです。

しかし 水の神は

なにも 答えてくれませんでした。

三日三晩考えた 火の神は、

ニンゲンの「知恵」を 信じて

願いを 聞き入れることにしたのです。

ただ、

「火を与えるについては

ひとつ 約束がある。

火を使って 殺し合いを してはならぬ」

と 火の神は つげました。



火のおかげで
夜の暗闇が遠ざかりました。
洞くつの中も

あかあかと照らされ
体があたたまると
病気もへりました。

獣から身を守ることが
できるようになると

心がおだやかになり
火をかこんで

言葉がかわされ
笑いや歌も生まれました。

ニンゲンは火の神に
感謝の祈りをささげました。



火^ひをいただき 闇^{やみ}がさった
火^ひをいただき 獣^{けもの}がさった
火^ひをいただき 飢^うえがさった
火^ひをいただき われらは 勇^{ゆう}氣^きをえた
火^ひをいただき われらは 力^{ちから}をえた
火^ひによって われらの世^せ界^{かい}は かがやき
ニンゲンの世^せ界^{かい}が やってきた
われらこそ 地^ち上^{じょう}の えられし者^{もの}なり
いざ たたえんかな われらが火^ひの神^{かみ}を
いざ たたえんかな われらが火^ひの神^{かみ}を

ニンゲンは 火^ひの力^{ちから}をかりて
お湯^ゆを わかし
土^{つち}を 焼き
木^きを たわめ
銅^{どう}や鉄^{てつ}も 作り^{つく}出してゆきました。

こころが ゆたかになった ニンゲンは
おだやかに くらしていました。
争^{あらそ}いが おこっても
火^ひを 使^{つか}うことは ありませんでした。





火のちからを利用して
道具や機械を 発明するようになると、
ニンゲンは、
まわりの自然を
作りかえるようになりまし
た。
いつのまにか ニンゲンのまわりには
モノが ふえてゆきました。

もっともっと ゆたかになりたい
もっともっと ぜいたくしたいと 考えた
ニンゲンの心は くもりはじめ
満足することが
できなくなって ゆきました。

ゆたかさを 競いはじめ
奪いあい ゆずりあわぬ
ニンゲン同士で
戦争が はじまりました。
そして とうとう
火を武器に しはじめたのです。



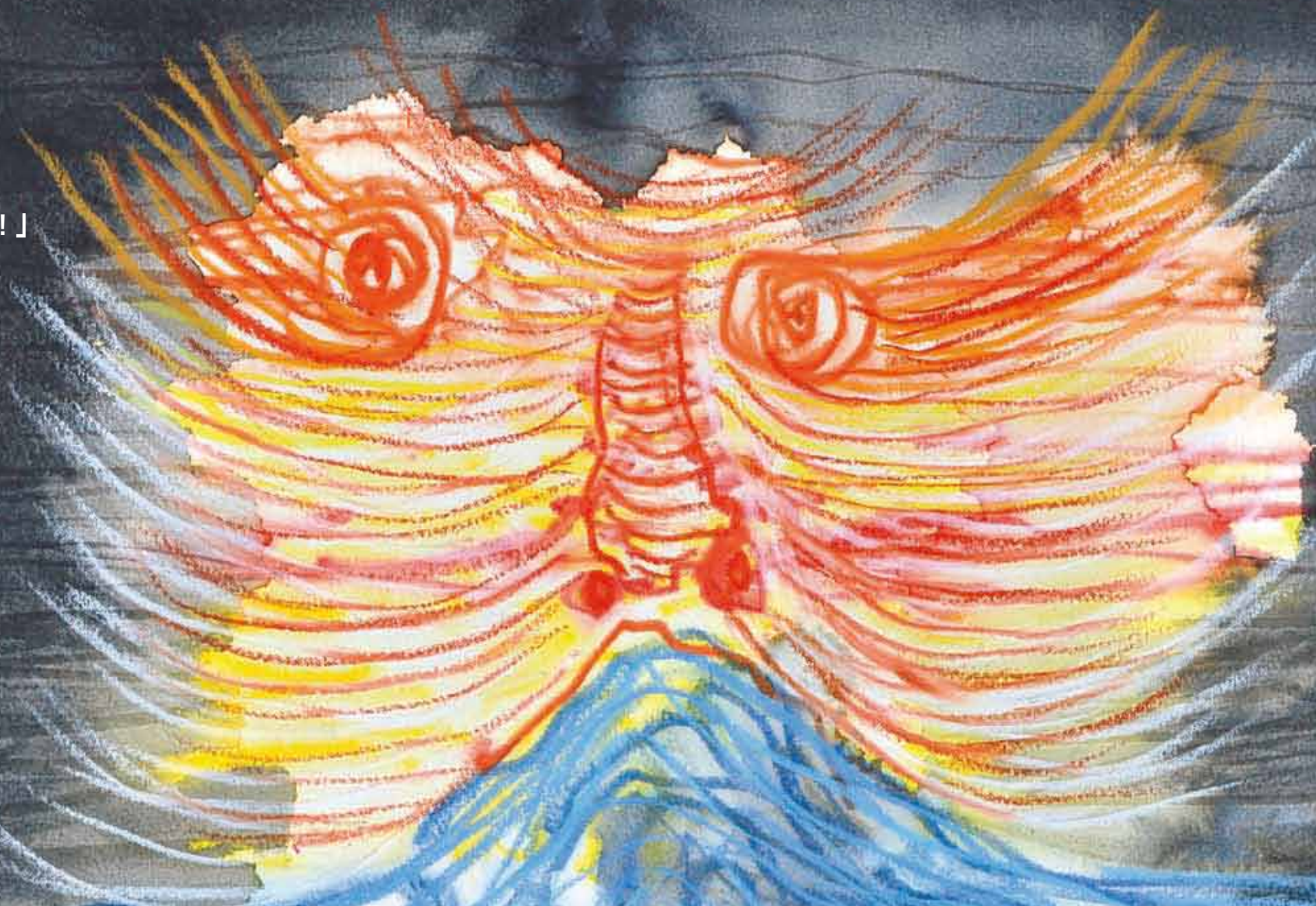
火^ひの神^{かみ}の使^{つか}い ヒノコは
ニンゲンに 火^ひの神^{かみ}との約^{やく}束^{そく}を
思^{おも}い出^ださせようと しました。
しかし 争^{あらそ}いは やみません。

それでも 火^ひの神^{かみ}は
「ニンゲンは それほど 愚^{おろ}かではないはずだ」
と、ニンゲンたちの争^{あらそ}いを 見^み守^{まも}っていました。
ニンゲンの中^{なか}にも
火^ひの神^{かみ}との約^{やく}束^{そく}を 覚^{おぼ}えている者^{もの}は いました。
しかし 争^{あらそ}いは ますます はげしくなるばかりです。

「ニンゲンは 約束を 守れるはずだ！」
火の神の^ひ声^{かみ}が ^{こえ}響^{ひび}きわたりました。

水の神^{みず}は ニンゲンの^{かみ}争^{あらそ}いを
だまって ^み見^みていましたが、
突如^{とつじょ}として ^{おおあめ}大雨^おが ^{はじ}ふり^{はじ}始め
河^{かわ}という^{かわ}河^{かわ}が あふれはじめました。
大洪水^{だいこうすい}に なったのです。

「ニンゲンには 知恵^{ちえ}があるはずだ！」
火の神^ひの^{かみ}声^{こえ}は イナズマとなっ
てなり^{ひび}響^{ひび}きましたが、
ニンゲンには とどきませんでした。

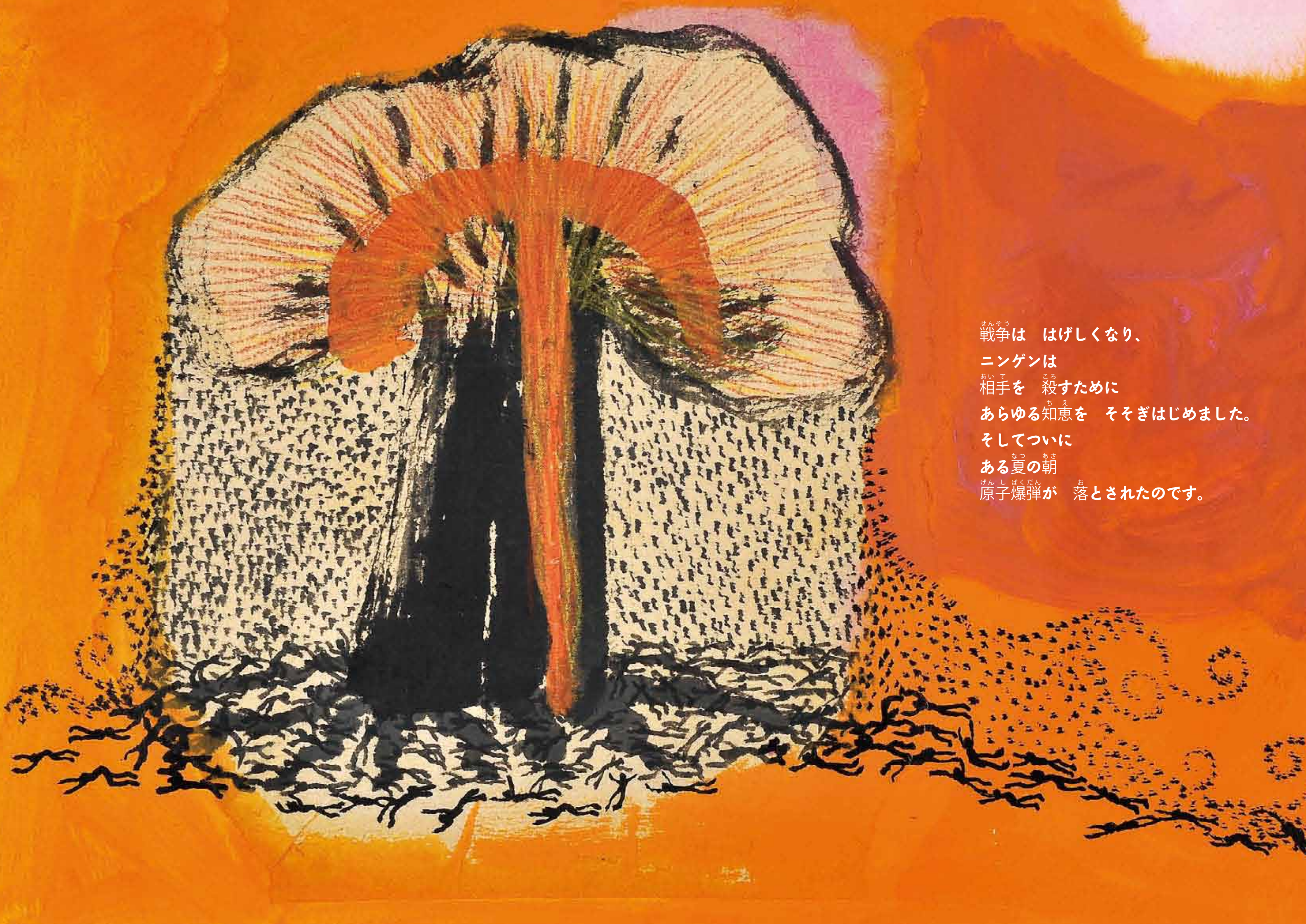




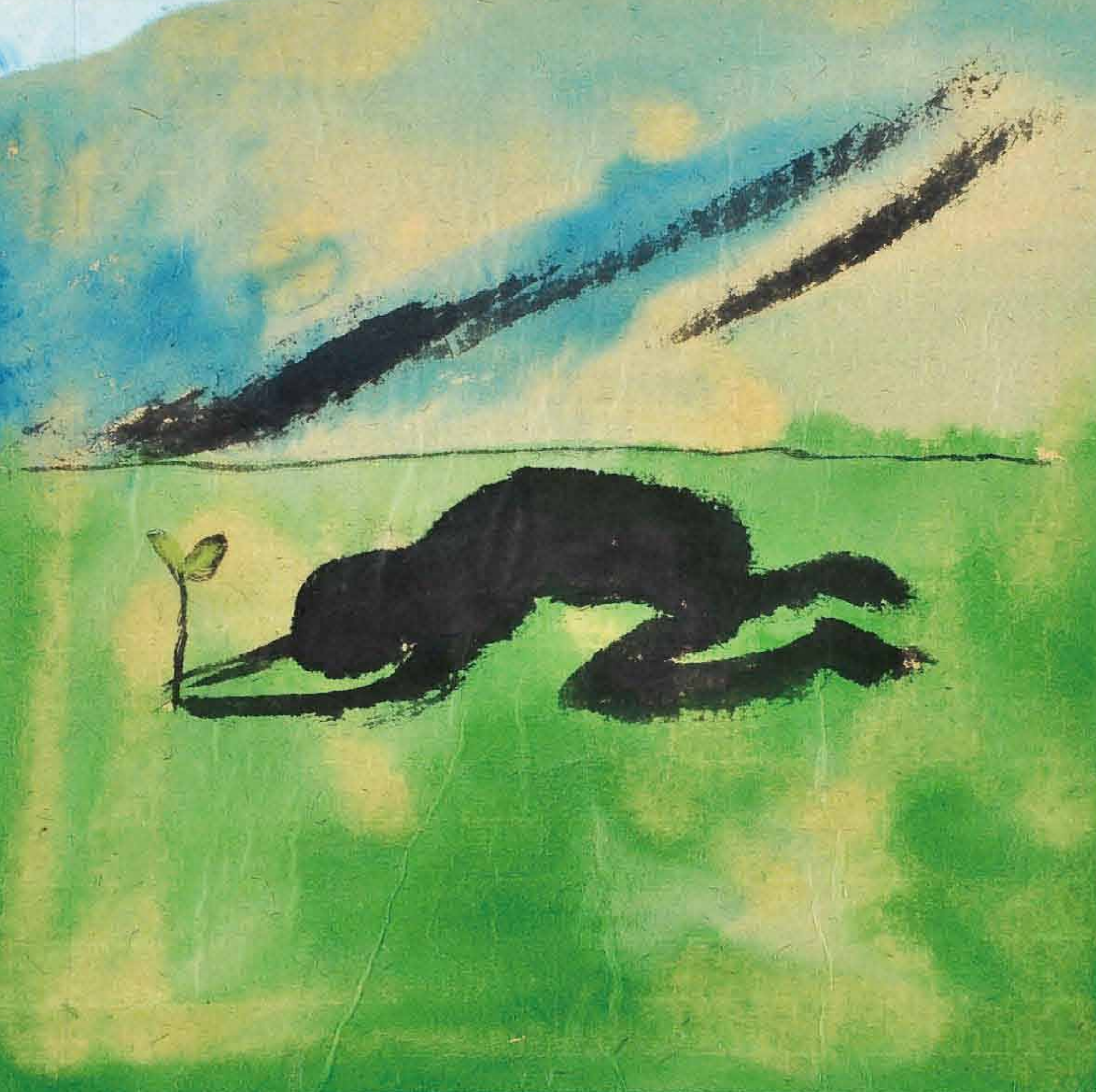
洪水が ひいた 後も
何千年も
戦争は なくなり ませんでした。

憎しみあい
奪いあい
殺しあい

争いの中で ニンゲンは
ますます武器を 強力に してゆきました。
そればかりか、ニンゲンは
火の神にも た 究極の「火」、
原子エネルギーを 発見 したのです。



戦争^{せんそう}は はげしくなり、
ニンゲンは
相手^{あいて}を 殺^{ころ}すために
あらゆる知恵^{ちえ}を そそぎはじめました。
そしてついに
ある夏^{なつ}の朝^{あさ}
原子爆弾^{げんしばくたん}が 落^おとされたのです。



一瞬の閃光のしたで
建物^{たてもの}は破壊^{はかい}しつくされ

たくさんのニンゲンが死^しんでしまいました。
あまりのひどさに

うちのめされた ニンゲンは、
二度と戦争^{にどせんそう}を してはいけないと
心^{こころ}に 誓^{ちか}ったのです。

しかし 原爆^{げんぱく}をつくることを
やめないニンゲンたちも いました。
争^{あらそ}いや戦争^{せんそう}も
なくなりませんでした。

原爆^{げんぱく}のこわさが
身にしみたはずのニンゲンたちも
「平和^{へいわ}」のための
「原子力^{げんしりょく}」の利用^{りよう}ということをも
思^{おも}いつきました。
ニンゲンには「知恵^{ちえ}」があるから
どんな危険^{きけん}な「火^ひ」でも 安全^{あんぜん}だと
いいはじめたのです。

多くのニンゲンが その言葉^{ことば}を 信^{しん}じました。
ゆたかに 快適^{かいてき}に 暮^くらすためには
その原子エネルギー^{げんし}の「火^ひ」が
必要^{ひつよう}だと 信^{しん}じこんだのです。



ある^{はる}春の午後、
大地^{だい ち}が 大きく ^{おお}ゆれはじめました。
おそろしい ^{じ な}地鳴りです。
しばらくして
海^{うみ}で 大砲^{たい ほう}を撃^うつような音^{おと}が したあと
大きな波^{おお なみ}が 黒^{くろ}い壁^{かべ}となって
陸地^{りく ち}に 押しよせてきました。

海^{うみ}辺^への「火^ひ」を守^{まも}っていた
建物^{たてもの}を 大波^{おお なみ}がおそい
高熱^{こうねつ}のかたまりとなった「火^ひ」が
爆発^{ばくはつ}したのです。
そして、目^めに見えない 放射^{ほうしゃ}性^{せい}物質^{ぶつしつ}が
空^{そら}と海^{うみ}と大地^{だい ち}に むかって
まき散^ちらされたのです。

火の神は
ニンゲンに 火を与えたことが
よかったのかどうか なやみました。
どうしたらいいのか 水の神に たずねました。

水の神は こんども なにも 答えてくれません。

火の神は 七日七晩 考えました。
そして もう一度だけ
あと一度だけ
ニンを 信じることにしたのです。

ニンの「知恵」ではなく、
ニンの 心の奥にある
「魂」を 信じることにしたのです。



ひ はなし
火の話のこと

くろだ せいたろう
黒田征太郎



しろ かみ
白い紙がある。
くろ えのぐ
黒い絵具をとく。
ゆっくりと黒色をかきまわす。
そして、それをしろ かみにぬる。
ゆっくりと、ぬる。
みぎ ひだり うえ した
右に 左に、上へ下へとぬり、
かみ
紙によくしみこませる。
まっくろい画面が出来上がる。
あんこく う ちゅう
暗黒の宇宙のようにみえる。
あんこく う ちゅう ちゅうおう
暗黒の宇宙の中央に、よくといた
か えのぐ いってき
まっ赤な絵具を一滴たらす。
あか ひろ
赤はゆっくりと拡がってゆく。
う ちゅう
宇宙のまんなかで
かがや たいよう で き あ
輝く太陽の出来上がりだ。
いろ たいよう
いろいろな色を太陽のまわりに
ちよんちよんと散らばしてみよう。
たいようけい で き あ
太陽系の出来上がりだ。
かみ め
神の目でみてみよう。
ち きゅう
どれが地球なのだろうか。
たいよう
たぶん、太陽とつながろうと
て
手をのばしている
いろ
グリーン色のこのしずくが、
ち きゅう
地球なのだろう。
ひ かみ たいよう
火の神である太陽から、
い
生きるための熱を
じょうず ち きゅう
上手にもらった地球というしずくには、
あめ ふ かぜ ふ
雨が降り風が吹き、
みず う
水からイノチが生まれるのだろう。

おくねん まんねん
億年も万年も、もっともっと
き とお
気が遠くなるような時を重ねて
イノチはイキモノになって、
なが なが じかん
そいつは永い永い時間を
かけてニンゲンになるのだろう。
ふるえておびえて、
ちい よわ
小さくて弱いニンゲンが、
なが なが じかん
ヒトになるまでの永い永い時間。
かみ たいよう し ぜん まな
神である太陽やまわりの自然から学び、
おそれ感謝しながら生きてきたヒトが
ひ し
火でクロスことを知ってから
げんざい ばや おそ
現在までのスピードの早さは恐ろしい。

このままでは……………
きもち ぼく きぶん ふくもとみつじ
そんな気持の僕の気分を福元満治さんが
いっさつ ほん
一冊の本にしてくれました。



黒田征太郎（くろだ せいたろう）
1939年大阪生まれ。画家・イラストレーター。米軍軍用船乗務員など多くの職業を経て、1969年、長友啓典氏とK2設立。1992年よりニューヨークにアトリエを構え、国内・国外で幅広く活動。主な作品に「KAKIBAKI」（求龍堂）、「戦争童話集・全4巻」（野坂昭如作 NHK出版）、「風切る翼」（作・木村裕也 講談社）、「もじと絵」（作・乾千恵 アートン）、「リオ 旅に出た川」（作・中上紀アートン）、「昭和二十年八さいの日記」（文・佐木隆三 石風社）他多数。2004年「PIKADON PROJECT」を開始。2009年活動の拠点を北九州市に移し、ライブペインティングや壁画制作等を精力的に展開。3. 11の大震災以降は東北にしばしば出かけ、表現者として全力投入している。

火の話 2011年12月8日初版第1刷発行

作 黒田征太郎 発行者 福元満治

発行所 石風社 福岡市中央区渡辺通2丁目3番24号

電話番号 092(714)4838 FAX 092(725)3440

印刷・瞬報社写真印刷株式会社 製本・株式会社 難波製本

落丁・乱丁本はおとりかえいたします。価格はカバーに表示しています

© Seitaro Kuroda Printed in Japan 2011